



地球上で一番素晴らしい動物、馬の魅力を多くの人に伝えていきたい。

全日本エンデュランス馬術大会2010選手権競技120kmのベストコンディション賞の馬体検査を受け終え、審査結果を待つ荒井亜紀さんとオセロ。写真提供/大津真由美



馬車から降りた子どもに、馬への安全なニンジンの与え方を教える場面も。馬はアルゼンチン産ファラベラポニー。



イベントが行われ、家族連れで大賑わいの門別競馬場。荒井さん率いる遊馬ランドグラスホッパーのミニチュアホースやポニーによる馬車と引き馬は大人気で、暗くなるまで行列は途切れなかった。



いつもと同様、この日も朝4時に起きて4時半には馬にまたがって調教をつけ、6時に朝食を取ってから午前中は獣医師としてひと仕事済ませた荒井さん。午後2時から休む間もなく馬を引いているのに疲れも見せない。「馬に乗ると、どの子も心の底からの笑顔を見せてくれます。それがうれしいですね。」



荒井亜紀 (あらい・あき)

(株)NOMADOC代表取締役・獣医師

1968年大阪府守口市生まれ。10歳から大阪乗馬協会で乗馬を始める。大阪府立四條畷高校卒業後、酪農学園大学(北海道江別市)を卒業して獣医師に。2002年の日高エンデュランスを皮切りに多数のエンデュランス馬術大会出場経験を持つ。2010年9月に北海道で開催された全日本エンデュランス馬術大会の選手権競技120kmでは、オセロIIに騎乗して初優勝した。

2010年9月に北海道で開催された全日本エンデュランス馬術大会選手権競技120kmの、人馬ともに疲れがピークに達しているゴール前。獣医師による馬体検査を考えれば常歩でゴールしてもおかしくないところだが、先行3頭のデッドヒートが展開された。最後に先行馬を差し切って初優勝を飾ったのが、オセロIIに騎乗した北海道の新冠町に住む獣医師の荒井亜紀さんだ。荒井さんは競技をこう振り返る。

「コースが平坦で、参加ライダーは実力者ぞろい。どの集団について行っても、最後はこうなることは予想できました。道中は、自転車競技のツール・ド・フランスのように、先頭を入れ替りながら走り、その先頭馬がそれぞれの得意技を発揮して集団を引っ張っていきました。」

実は、その先頭集団は実力伯仲のため、「手をつないでゴールしようかとも話していた」そうだが「観客や審判のことを考えて、最後の800mトラックで火花を散らした。それでも3頭とも跛行や心拍数オーバーもなく完走したことが、人馬のレベルの高さを如実に物語る。

荒井さんは2002年の初参加以来、毎年、数回のエンデュランス大会に参加し続けているベテランライダーだ。2007年の全日本大会ではサラブレッドのトライアンフIIに騎乗し、120kmで4位に入賞。「サラブレッドでの120km完走はこれが日本初。名誉の殿堂入りをした獣医師の青木修先生にお誉めいただきました。」

今回の優勝馬オセロIIは、サラの血が入ったポニーとトロッターの掛け合わせ。仔馬の時から手塩にかけて育てた馬でもあり、120kmへの挑戦3回目にして初完走と同時に優勝を手にした喜びはひとしおだ。

「古代から人間のために働いてきたのが馬。地球上に馬ほど素晴らしい動物はいないんじゃないでしょうか。」目を輝かせてそう語る荒井さんは、馬専門の獣医師として競走馬の診



全日本エンデュランス馬術大会2010選手権競技120km優勝の賞状とリボンを手にする荒井亜紀さん

察・治療やリハビリを行うほか、餌などの販売と、みずからも外乗ガイドを務める遊馬ランドグラスホッパーという外乗部門を持つ(株)NOMADOCの経営者だ。子どもたちに馬の魅力を知ってもらおうと、イベントなどでのミニチュアホースやポニーによる引き馬や馬車の運行にも意欲的に取り組む。最近では、ミニチュアホースや乗用馬の生産者と馬を飼いたい人との橋渡しをしようと、「北海道うまプロジェクト」の設立・運営も。まさに、「馬がない時がない生活」を送っている。

「競走馬の馬主だった父親に連れられてよく競馬場に行っていたため、小学校低学年の頃から馬好きで、「馬の絵には必ず鞍も描いていました」という荒井さん。子どもの頃、まず最初に志したのが競馬の騎手だった。10歳から乗馬を始め、中学生の頃から内藤繁春調教師が開設した優駿牧場に入入りし、15歳の誕生日を同牧場で迎えた。高校入学後は、夏、冬、春などの休みごとに大阪から北海道に飛んで、「丁稚奉公のつもりで」アルバイト。寝むら上げなど作業はきつかったが「早く職業として馬に関われるようになりたい」と頑張った。

高校3年の冬休みに「友だちから、馬が好きなら獣医さんで道もあるんじゃない?と聞かれたことがきっかけ」で酪農学園大学獣医学科の2次募集を受験。急な受験だったが、無事合格。「こうしたい、と思ったらそういう風が吹く」強運の持ち主で、大学入学後に始めたオートバイのロードレースでは、北海道のレディース・チャンピオンになったこともある。

「競走馬、乗馬を問わず、馬について広く知ろうと、大学の馬術部には入らずあちこち放浪」する中で、多くの「馬の師匠」との出会いもあった。米国GIを3勝して「年度代表馬(生涯成績ではGI4勝)に選ばれたエービーインディの落札などで伝説的な馬の仲買人の佐藤伝二さんもそのひとり。「佐藤さんには何度もアメリカのセリに連れて行っていただいて、馬の見方を教わりました。」

4年生からは、金曜日の夜に授業が終わると江別から日高へとバイクを駆って、今も師匠と仰ぐ獣医師の宇毛親さんの元に駆けつけ、診察・治療に同行。臨床現場で多くを学んだ。「興味をもって勉強したのは馬のことばかり。大学では落ちこぼれでした」と言うが、23歳で獣医師免許を取得した時には、こと馬については、

ほかの新米獣医師とは比較にならない豊富な体験と知識を身につけていた。

以来、馬専門の獣医師として走り続けて19年。「かつては2~3日寝ないで仕事をしていたことも」あったが、10年前にひとり娘の三冬ちゃんを出産後は仕事をセーブ。「その代わりに、馬の歯のヤスリ掛けや狼歯の抜歯などのきつくて時間もかかる3Kの仕事は毎日のようにやっています。」

そんな肉体的にも精神的にもタフさが求められる獣医師の仕事は、エンデュランスにプラスになっているという。「例えば、歯の治療では持続的な腕力がつきます。それに、獣医師は疲労から判断を誤ってはいけないので、肉体的な意味でも精神的な意味でも力を分散させて疲れ過ぎないように心がけていますが、これはまさにエンデュランスで必要なことなんです。」

気力、体力ともに人並外れている荒井さんだが「実は、13回の入院歴があり、体はボロボロ。股関節年齢は80歳と言われてます。」しかし、「だからこそ、人馬共に同じ場所に負担をかけないよう、姿勢を変えて乗れるように」と研究をした。

一時は80kmが限界と思えた距離も、「レグごとに下着や靴下も含めて服を全部着替えることで延ばすことができました。」その体験から、「お尻部分にパッドの入ったイタリア製の自転車競技用コンプレッションタイプのロングタイツはお尻が痛くならず、お薦めです」とオープンに語る。

長距離になればなるほど、忍耐力はじめ、強い精神力も必要となるエンデュランス。「逆に言えば、現代人の精神力強化にも非常に役立つと思います。持続的な集中力もつきますし、興味がある人はぜひトライしてみてください」と呼びかけている。

精力的に動き回っているだけに馬関係の知り合いは多いが、「今後は、もっといろんな方とのおつきあいを広げていきたいですね」と抱負を語る。どこまでも前進気勢の強いホースパーソンなのである。

文と写真 = 菅井亜沙子
by SUGAI Asako

取材協力 / 門別競馬場

遊馬ランドグラスホッパー

【事務所】北海道日高郡新ひだか町静内御幸町2-6-82

【TEL】146-49-5511

【E-mail】grasshopper@nomadoc.com

【URI】www.phoenix-c.or.jp/world